愛知教育大学研究報告，55（教育科学編），pp. 127～136， March, 2006

現代小説教材における「国語科学習・評価システム」の開発

—村上春樹「七番目の男」（高３・第一学習社）の授業モデルを例に—

佐藤洋一*　　常原　拓**

Yoichi SATO　　Taku TSUNEHARA

*国語教育講座

**神戸市立神陵台小学校

1　小説教材指導の現状と課題

—新課程・「絶対評価」に対応した「国語科学習評価システム」の開発—

これまでの国語科教育において，物語・小説教材指導は教科内容の中心的な役割を担ってきた。しかし，現行学習指導要領が基づく教育課程審議会答申（1998年7月29日）によって，「小学校，中学校及び高等学校を通じて，言語の教育としての立場を重視し」や「特に，文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」といった，いわゆる物語・小説教材の指導観の転換が求められている。

この答申の背景には，長時間をかけて登場人物の気持ちや1つの主題＝作家の思想や意図を細かく追求する指導，物語・小説の言語構造や表現の特質（＝言語技術）を無視した“徳目的・道徳的な指導”など，「言語の教育」としての国語科教育から乖離した指導が広くなされていたことがあげられるだろう。

また，新課程から採用された「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」に対応した授業を構築することが，教育現場では急務である。とりわけ，学習者に身に付けさせたい学力（到達目標）が戦後50年以上曖昧にされてきた国語科においては，現在，新しい評価観に対応した学習・評価がなされているとは言い難い面がある。

本稿は，物語・小説教材の中で，小学校高学年から高等学校までに頻出する，いわゆる現代小説教材について，「言語の教育」という立場から，到達目標（評価基準）を明確にした「国語科学習・評価システム」として，村上春樹「七番目の男」の授業モデルを提案し，21世紀における現代小説教材指導の意義や特質，学習過程や指導方法について明らかにしようとするものである。

2　国語科「言語能力」と小説教材

—言語能力育成と国語科「二重構造」—

まず，学校教育全体において，国語科はどのような位置にあり，どのような役割を担っているのか。それを明らかにするために，いわゆる絶対評価の学習・評価観を前提にした国語科の教科構造について，そのポイントを確認しておきたい。

国語科学習は，学校教育全体の「（広義の）基礎・基本学力」を形成するとともに，国語科固有の到達目標（評価基準）をも育成する。つまり，国語科という教科の学校教育における役割を「二重構造」としてとらえることが重要である。国語科の特質を把握し，学校教育全体のカリキュラムに構造的に位置づけることで，全教科を支える国語科の役割が明確になるからである。

その中で，小説教材指導は，教科固有の国語科「言語能力」を中心に育成する1つのジャンルということになる。漢字や語句指導・音読指導などの学校教育全体における（広義の）基礎学力育成と，物語・小説教材の言語構造や表現の特質を理解する国語科固有の学習とを，異なったレベル（学習過程）としてとらえることで，学習者に何を学ばせたいかという到達目標（評価基準）が明確になるのである（参考文献5・6）。

物語・小説を含む，いわゆる文学的文章の特質とは，日常用語による日常的な実感の表現であり，作家固有の「構造」「描写」「文体」などの表現技術によって書かれた個性的な作品群であるということができる。小説教材指導とは，説明文教材や教科書・説明書などの論理的文章とは異なる言語技術を読み解き，自分らしく解釈するという，国語科固有の学習によってのみ育成すべき「言語能力」の1つということができる。

3　〈情報〉としての小説教材

—〈情報リテラシー〉による国語科の捉え直し—

従来の“徳目的・道徳的な小説教材指導”の問題点をふまえ，学習者全員に国語科「言語能力」を「確かに（論理的に）」「豊かに（個を生かす）」保障するためには，到達目標（評価基準）を明確にした新しい「国語科学習・評価システム」を構築することが必要である。そこで，〈情報リテラシー〉という新しい概念を導入し，新しい小説教材指導観について考察していくことにする（参考文献5～8）。

ここでいう〈情報リテラシー〉とは，いわゆるコンピュータ・リテラシーとは異なり，国語科を新しいリテラシー教育としてとらえた言い方である。すなわち，広義の「情報」の判断・発信・評価能力のことであり，言語や非言語・映像・シンボル等の「情報」を正確に読み取り（「読む」「聞く」受信），自分の立場から判断し「生きる力」に生かす能力，また，ある目的から情報を収集選択し（情報の発見／収集と選択），判断構成し（論理的な構成・書く・まとめる），目的や場面・相手に応じて発信交流する言語技術（話す・聞く・プレゼンテーション），交流し学び合い評価する技術（かかわり・関係を創る技術），さらに新たな課題や情報を発信する言語技術等を一連の学力としてとらえたものである。

〈情報リテラシー〉という発想による学習・評価観は，これまでの国語科教育が，「生きる力」に展開する基礎学力や情報社会に必要不可欠なコミュニケーション・プレゼンテーション能力等の表現力・思考力，情報を主体的に読み解き発信する力を十分に育ててこなかったという反省の上に成り立っている。それは，小説教材指導においても言えることである。表現構造の特質を軽視した内容偏重や1つの主題追求型の指導観や，学習者の恣意的な解釈を全て認める安易な読者論的指導観は，小説教材の特質をいかした指導法とは言い難い。そこで，小説教材を国語科「言語能力」育成の視点から，小説の言語構造や表現技術を「情報」としてとらえる新しい教材観が必要となる。

小説教材を「情報」としてとらえることには，大きく二つの側面がある。

一つはいわゆる学習者の主体的な「情報」理解・選択判断・批評を重視する立場で，文学の多様な「情報」を通して身近な生活経験や現実の中に課題を発見し（情報の発見），解決のための方法を考え，情報を収集・構成し発信するための一つのモデルとすることである（情報の発信）。これは，小説教材の表現や内容などの「情報」を，自分の立場から発見・収集・選択・再構成し，発信することを視野に入れた教材観であり，従来の小説教材指導においても，新聞作り・ブックトークなどの言語活動として実践されてきた。

しかし，小説教材を安易に発信のための「素材」として扱うことは，学習者に身に付けさせるべき小説教材の「読み方＝評価基準」を無視した，単なる言語活動に終わってしまいかねない。

そこで，もう一つ，教材の持つ構造や描写・文体・メッセージ等の方法（小説の方法と読み方の学習）を学ぶ観点，つまり，説明文・論説文等の「論理的な言語」の学習とは別な形で，身近な現実の深層や自己を深く理解する一つの方法（モデル）として展開していくことになる観点からとらえることが必要である。小説固有の表現的特質や構造を「情報」ととらえることで，小説教材で何を学習すればよいかという到達目標が明確になり，他の小説学習にも応用可能な一般的な「読み方＝言語技術」を指導することによって，広く読書指導などに展開できることにもなる。

小説教材の表現的特質の「読み方」学習と小説教材の「情報」を発信する学習，この双方からのアプローチによって，従来の小説教材の狭い学習指導観・評価観からの脱却が可能になるのである。

4　〈五段階の学習過程論〉による授業研究論

—学習過程論再構築による「学び」の系統化—

小説を「情報」としてとらえることによって，学習者の「確かな学力」と主体的な「学び」が保障される。しかし，それらを部分的・断片的にとらえるのではなく，国語科「言語能力」を基礎から発展・「学び」の一般化まで構造的に位置づける学習過程論レベルで整理し，考察することが必要である。

例えば，戦後の国語科教育における代表的な学習過程論として，「国語科単元学習」の発想を無視することはできない。「国語科単元学習」の内実，方法は多岐に渡り，一括りに定義することは困難であるが，大村はま氏の実践に見られるような，学習者の興味・関心に基づいた教材開発，国語科の学習内容（三領域一事項）の横断的・網羅的な単元の組織化など，「国語科単元学習」の果たした役割は大きい。

しかし，長時間の単元構成や，学習者の興味・関心によってのみ展開される学習段階（系統性）などは，限られた授業時間数や「公教育」として果たすべき国語科「言語能力」の育成という視座から，21世紀に求められている国語科の新しい「学習・評価システム」とは言い難いと言わざるを得ない（参考文献9）。

そこで，シンプルで「学び」の系統性を意識した〈五段階の学習過程論〉を提案したい。国語科の「二重構造」という特質や，「情報」としてとらえた小説教材観を〈五段階の学習過程論〉として位置づけることで，学習者の「学び」の段階を明確にできるからである。

資料１　小説教材における〈五段階の学習過程論〉

学習過程（段階）	学習過程論における位置づけ	学習活動例
基礎学習	全教科を支える基礎学力としての言語能力育成の段階	音読、意見・感想を持つ技術、「話す・聞く」学力の基礎など
基本学習	小説教材を「正確」に「豊か」に読み解く言語技術育成の段階	①状況設定 ②構成 ③中心人物の変化 ④対比的人物の位置 ⑤描写と方法 ⑥主題の構造・批評性 （①～⑤：「正確」に／⑤～⑥：「豊か」に）
発展的学習	小説教材の「読み方」の定着と発展学習のためのステップとしての段階	個性的な小説教材の解釈、小説教材の〈情報〉発信のための〈情報〉収集・選択・再構成など
発展学習	小説教材の〈情報〉を自分の立場から発信（紹介・批評など）する段階	再話、感想文、登場人物への手紙、描写を詳しく書く作文、劇化、ブックトークなど
評価・一般化学習	小説教材の「学び方」についての自己・相互評価を行い、学習を一般化する段階	到達目標（評価基準）を明確にしたチェックカードの記入、学習で学んだこと・考えたことの文章化など

各学習段階において評価の観点の意識化

〈五段階の学習過程論〉とは，「基礎学習」から「評価・一般化学習」までの系統的・組織的な学習段階の位置付けのことである（資料１参照）。

〈五段階の学習過程論〉として学習内容を構造的に位置づけることで，指導者・学習者ともに，「学び」の段階を意識することができるようになる。あれもこれもを詰め込んだ言語活動主義的な授業観・評価観から抜けだし，国語科「言語能力」を確かに育てるために，常に学習段階とつける学力，個々人の課題を意識して授業を行うことが必要なのである。

また，基礎学習から評価・一般化学習までを常にセットとして実践する必要はなく，例えば，「基礎学習→基本学習→評価・一般化学習」という小説教材の「読み方」学習を行ったり，中学校の選択教科「国語」において，一斉授業での基本学習をいかした「発展的学習→発展学習→評価・一般化学習」という発信学習中心の授業を行うことも有効である。つまり，授業実践において，どの段階でどのような国語科「言語能力」を育成するかを明確にするために，〈五段階の学習過程論〉は有効であると言えるだろう（参考文献10）。

5　現代小説教材分析・解釈の観点

「現代小説」は時代区分など，様々な視点から定義されているが，本稿では，社会・国家対個人という構図を持ち，無意識の心理描写などの19世紀的小説とは異なる表現的特質を持つ小説群としてとらえたい（市毛勝雄「近代文学」の項目『国語教育研究大辞典』明治図書，1988年，221～224ページ参照）。

現代小説教材を分析・解釈するために，ここでは以下のような6観点を設定した。

(1) 状況設定の理解
　…登場人物・舞台・時代背景など
(2) 構造をとらえる
　…場面構成（プロット）
(3) 中心人物の変化と解釈
(4) 対比的人物群の役割と位置
　…中心人物との関係など
(5) 特有の描写と方法
　…イメージの描出とその効果
(6) 主題の構造と批評性
　…①作家の意図・思想型
　　②中心人物の変化・作品構造型
　　③読者の自由な解釈型

（(1)～(5)：正確に／(4)～(6)：豊かに）

これは，どのような現代小説教材を解釈する場合でも有効な観点である。１つの教材だけにしか通用しない方法ではなく，「言語技術」として一般化可能な観点を学習することで，学習者の興味・関心など「生な現実」に対応した読書指導に展開するのである。

6　現代小説教材の特質と教材研究

—村上春樹「七番目の男」を例に—

村上春樹の作品は「鏡」・「レキシントンの幽霊」・「沈黙」など短編小説を中心に主に高等学校で教材化されている。身近な事件を描きながら，その深層に自己・他者とのコミュニケーションの問題など，現代人のあり方を問い続ける村上春樹の方法は，構造的に小説教材を学習するためにふさわしい教材であるといえる。すなわち，生徒に現代社会の中でいかに生きるか，他者と〈かかわる〉とはどういうことか，自分とどう向き合うことが大切か等の内容的なことばかりではなく，小説固有の言語技術の学習を通して「語り」「描写」等の言語の豊かな機能について指導することができる。

「七番目の男」は，『文藝春秋』(1996年2月）に発表され，短編集『レキシントンの幽霊』（文藝春秋，1996年11月）に収められている短編小説である。なお，本作は第一学習社版『高等学校　現代文』（平成15年度版）に掲載されている。

さて，本作品の代表的な教材論の1つとして，教科書の指導書（永井聖剛氏執筆）がある。指導の要点としては，冒頭と結末の三人称の「語り」による「枠小説という作品構造」に注目し，過去の体験・記憶を再認識するための「物語行為＝自己相対化」の意味を読み解くことがあげられている。

この指導観は一つの主題に到達するための表層的な内容主義的解釈に陥っており，人物の設定やその変化，描写・文体の特質といった表現技術，深層にある村上春樹の問題意識等がとらえられていないという問題点や不備が多い。言語技術としての分析・解釈の観点をふまえ，以下，本作品の特質と指導の要点について述べる。

(1)〈恐怖小説〉としての二重構造

短編集『レキシントンの幽霊』は，日常での恐怖体験についての物語（表層）の裏に，現代社会（現代人）を支配する無意識の恐怖（深層）が描かれるという構図を持っている。

「七番目の男」では，表層で，台風の来襲にあたり，恐怖から親友である「K」を見殺しにし，その時の「K」の非現実的な笑いが40年もの間，「男」を苦しめ続けるという恐怖が語られる。

そして，深層では，40年もの間，男を苦しめ続ける「無意識による現代社会（現代人）の支配」が描かれるという，二重構造を読み解かせることが重要である。日常生活で自己と向き合うことのできない現代人としての「男」は，理不尽で強大な力（台風）によって否応なしに自己と深層（無意識）で向き合う心理描写の過程（意識と無意識の描写）こそがこの作品の中核だからである。

村上春樹の小説では，豊かな無意識の描写によって，現代社会への批評性が表現されており，これは村上龍，江國香織，山田詠美，池澤夏樹等，他の現代作家にも共通する特質である。

(2) 場面構成と作品構造

本稿では指導書と異なり，作品を全12場面からとらえた。なお，ページ数は『レキシントンの幽霊』（文藝春秋，1996年11月）による。

1場面…プロローグ・状況設定（現在）（～P 165 .L4）
2場面…状況設定（過去）（P165.L6～P167.L5）
3場面…展開①〔台風の来襲〕（P167.L6～P169.L6）
4場面…展開②〔台風の「目」と波の予感〕（P169.L7～P175.L11）
5場面…展開③〔Kの喪失〕（P175.L12～P.178L5）
6場面…展開④〔Kの笑い〕（P178.L6～P180.L14）
7場面…展開⑤〔損なわれた現実〕（P181.L2～P183.L5）
8場面…展開⑥〔無意識のトラウマ〕（P183.L6～P185.L7）
8場面…展開⑦〔現実逃避と無意識〕（P185.L9～P187.L13）
10場面…発展〔Kの水彩画〕（P187.L14～P191.L3）
11場面…結末〔現実への回復〕（P191.L4～P194.L14）
12場面…エピローグ〔恐怖の真相〕（P195.L2～）

全12場面は，1・12場面は現在から自己を語る場面，2～6・10～11場面は，過去の現実でのエピソードが描かれる場面，7～9場面は無意識で自己と向き合う場面と3つの異なった位相から構成されている。

「現実→無意識→現実（「語り」）」という作品構造を各場面構成から整理すると，中心人物である「男」の変化とその要因・効果的な描写・対比的人物であるKの設定の効果などの観点が明確になり，とらえやすくなる。小説の構成単位である「場面」を学習者に指導することは，基礎的な学習の1つである。

(3) 人物設定とその効果

小説教材を読み解くにあたって，登場人物の設定（性別・年齢・風貌・性格など）は，学習の最初に確認しておくべき観点である。

本作品では，中心人物である「男」の10歳という年齢が，精神的に子どもでもなく大人でもない微妙な時期であり，「K」を死なせたという事実は認識できるが，その事実をうまく受けとめられず，無意識へと逃避せざるを得ない人物設定として描かれている点を確認しておきたい。

また，対比的人物である「K」の，「言葉に障害が

あ」り，「絵が滅法巧」いという人物設定は，「見る」という視覚の機能を際立たせるためであり，事実，「男」はKの描いた水彩画を「見ること」で現実へと回帰するきっかけを掴む。その「K」の水彩画とは，「語る」という行為の欠落を抱えた「K」が，世界と繋がる為の唯一の手段であり，「K」の水彩画によって「男」は現実を見ること（無意識から回帰すること）が出来たのである。表層の恐怖よりも大きい「現実から目をそらすこと」，そこから「男」を救った「K」の水彩画の意味をとらえることで，本作の特徴である「男」の語りという心理描写の独特な方法の意味が明らかになるのである。

(4) 描写の特質

小説教材の特徴的な表現方法として，描写の学習は必要不可欠である。ここでは特に，中心人物である「男」の二度の変化，つまり，無意識へと逃避するきっかけとなる巨大な波の描写と，現実を取り戻すきっかけとなる空を見上げたあとの描写に注目したい。

まず前者は，音のみの描写・無音による視覚のみの描写・聴覚と視覚による描写を組み合わせることによって，巨大な波の恐怖が冗長に表現され，まるでスローモーションの映像のようなインパクトを与えている。

後者は，40年もの長時間の孤独（無意識）から男が解放され，現実に戻されていく様子が，時間・音・光・身体感覚などの緻密な表現によってダイナミックに描かれている。

作品中の特徴的な描写に気付かせることによって，小説特有の言語表現とその意味を学習することができる。どのような描写によって，イメージを描き出しているかをとらえることで，それぞれの作家の個性的な文体などを考えていく方法を身に付けることができる。

7　村上春樹「七番目の男」の授業モデル（要点）

(1) 到達目標（評価基準）と国語科「言語能力」

〔基礎学習〕

①すらすらと音読し，「読み方」の観点に沿って感想をもつことができる。→音読・自分の立場の意識化

〔基本学習〕

①現代小説の場面（構造）を意識して読み，あらすじを「正確」にまとめることができる。

②中心人物の変化とその要因・対比的人物の役割・描写・主題の構造が「正確」に，「豊か」に解釈できる。　→「情報」の「正確」で「豊か」な理解

〔発展的学習〕

①基礎・基本学習をふまえ，個性的な解釈ができる。

②論理的な作品紹介文を書く観点を理解できる。

→論理的な「情報」発信の基礎・基本

〔発展学習〕

①論理的な作品紹介文を書くことができる。

②作品紹介文を自己評価・相互評価することができる。　→論理的な「情報」発信と交流・評価能力

〔評価・一般化学習〕

①学習した内容（到達目標の観点）を意識し自己評価・一般化できる。　→メタ評価能力

(2) 学習計画（9時間完了）

……（資料２を参照）

(3) 学習シートの開発・活用と授業展開のポイント

本稿では，6枚の学習シートを開発して，授業モデルを構想した。学習シートを用いることにより，生徒に小説教材の「学び方」を明示できると共に，学習の記録として位置づけることができ，生徒の学力が保障される一つの有効な方法であると考えたからである。また，教材研究で考察した学習構想や主要発問を学習シートに示すことによって，より具体的な授業モデルが提案できるとも考えている。以下，授業の展開と学習シートの活用の仕方（要点のみ）について述べる。

①生徒の感想をいかした小説教材の指導

生徒の初読での感想と教材の分析・解釈を結びつけるために，学習シート１（資料３）を用いる。初読の段階で感想を持てることは基礎学力の一つであり，ここに生徒の学びの質と個性があらわれる。ただ漠然と感想を持たせるだけでなく，小説の「読み方」の基本学習へと繋がるように，観点を意識させ，言語化させることが重要である。自分の考えの根拠を明らかにすること（観点１・2），小説教材解釈への気付き（観点3），描写への着目（観点4）などを意識させることによって，基本学習での生徒の「学び方」への問題意識を高めることができる。

②モデルとしての「読み方」の観点の提示

基本学習では，学習シート２・３（資料４・５）によって，あらすじ・場面構成，作品構造の理解，中心人物の変化と要因・対比的人物の役割・描写の方法・主題の構造などを「正確」にとらえ，「豊か」に解釈するための観点を提示した。村上春樹作品の解釈を通して，その他の現代小説の「読み方」（着眼点）を生徒に定着させるためである。これらの観点を意識させながら，基礎学習での生徒の気づきを取り上げ，生かしていく指導が必要である。

学習シート２は，作品全編を１枚のシートにまとめることにより，あらすじなど基本的な事項が理解し易いように工夫してある。

学習シート３は，主要発問を明示することにより，

資料２　学習計画（９時間終了）

段階	時	学習活動（指導事項）	評価の観点と方法、指導・支援
基礎学習	1	1　作品を音読する。 2　【学習シート１】を記入する。	1〈指〉 ・教師による範読・指名読みなど工夫して行う。 ・場面分けは教師が指示する。 2【学習シート１】の観点 ①興味を持った場面とその理由 ②疑問に思った・考えたい場面とその理由 ③小説を読むために重要な場面・表現とその理由 ④優れた表現・イメージとその理由 ⑤考え・意見 〈評〉 ・すらすら音読ができたか。 ・観点を意識して感想をもてたか。
基本学習	2	1　【学習シート１】による感想の交流をする。 2　【学習シート２】を記入し、現代小説の構造を理解し、あらすじをまとめる。	1〈指〉 ・良い着眼点の感想をプリントにまとめて生徒に紹介し、自分の気付かなかった観点に気付かせる。 2〈指〉 ・場面ごとに音読・黙読しながら、学習シート２を記入させる。 【学習シート２】の観点 ①状況設定 ②作品の構造と各場面のあらすじ 〈評〉 ・現代小説の構造・あらすじを理解できたか。
	3 4	3　【学習シート３】を記入し、人物像の設定とその変化・描写・主題の構造について理解する。	3【学習シート３】の観点 ①中心人物の設定とその効果 ②中心人物の変化とその要因 ③優れた描写とその効果 ④対比的人物の設定とその効果 ⑤象徴的イメージと主題の構造 〈評〉 ・現代小説の特質である人物設定・描写・主題の構造を理解することができたか。
発展的学習	5	1【学習シート４】によって、個性的な観点からの作品紹介について考える。 2【学習シート４】によって作品紹介文を書くための観点を理解する。	1〈支〉 ・机間巡視を行い、登場人物や描写などに注目した作品紹介の観点がもてているか助言する。 ・個性的な観点がもてない生徒には、授業で取り上げた箇所から選ぶように助言する。 2【学習シート４】の観点 ①４段階の論理的構成 ②あらすじをまとめる ③具体例の選択と引用 ④個性的な「むすび」とタイトル（キーワードの一般化） 〈評〉 ・個性的な観点をもち作品を読めたか。 ・論理的な文章の書き方が理解できたか。
発展学習	6 7	1【学習シート５】に作品紹介文を書く。	1〈支〉 ・机間巡視を行い、書き方について助言する。 ・早く書けた生徒には、論理的構成を工夫するよう助言する。 〈評〉 ・４段階の論理的構成で書けたか。 ・「なか１」であらすじを要約できたか。 ・「なか２・３」で引用を効果的に使うことができたか。 ・「むすび」と「タイトル」を工夫することができたか。 ・論理的構成を変形してより効果的に工夫することができたか。
	8 9	2【学習シート５」（作品紹介文）を相互交流し、相互評価を行う。	2〈支〉 ・グループ（４人）ごとに相互交流し、他の生徒の観点や表現を相互評価させる。 〈指〉 ・よく書けている作品紹介文（６～８編）を印刷して配り、優れたところを発表させる。 〈評〉 ・他の生徒の優れたところを見つけ、評価することができたか。
評般価化・学一習		1【学習シート６】で学習内容を振り返り一般化する。	1指〉 ・【学習シート６】は単元の開始時に配布し、随時自己評価を行う。本時は、観点を確認し、今後の学習のために一般化を行う。

生徒に何が理解できればよいかという到達目標（評価基準）を意識させることができる。

③発展的学習における基礎学習・基本学習のまとめ

発展的学習では，基本学習での現代小説解釈の方法をふまえ，論理的・個性的に発信するためのステップとし，基礎学習・基本学習での観点をいかした個性的な解釈を行うことを目標とする。個性的な解釈とは，自由な発想で生徒の体験や読書経験などと関連づけ，人物・描写・モチーフ・主題などを検討することである。

生徒の自由な解釈は，ややもすると小説の論理的な「読み方」を無視した恣意的・断片的な解釈に陥りやすい。しかし，解釈の観点を指導した上で自己の体験と結びつけることにより，小説を「確かに（論理的に）」「豊かに（個を生かす）」解釈する方法を学習することができる。

④論理的文章指導としての作品紹介文を書く学習

発展的学習・発展学習では，学習シート４・５（資料６・７）を用い，自分の解釈をもとに作品紹介文を書く学習を行う。作品紹介文はただ感想を述べるだけでなく，自分の立場を明確にし，４段階の「論理的構成（はじめ・なか・まとめ・むすび）」で，要約・引用・キーワードによる一般化（タイトルのつけ方）などを意識して指導する。到達目標が曖昧な言語活動に拡散させるのでなく，論理的なプレゼンテーションの方法を指導することは，現在求められている国語学力育成において重要な課題である。

論理的な作品紹介文を書く観点を教え，生徒同士での交流学習によって個性的な解釈を紹介させることで，他の生徒の個性的な解釈から，新たな課題を発見することができる。

⑤「学び方」の観点を意識・定着させる評価・一般化学習

学習シート６（資料８）を学習の最初から提示し，生徒に常に「学び方」の観点を意識させることが重要である。何がわかればよいのかを明確にすることで，今後の学習や普段の読書活動へ繋がる学習となるからである。

8　研究の成果と考察―まとめにかえて―

(1) 国語科「二重構造」をふまえた小説教材指導の意義と位置付け

求められる国語科「言語能力」を，教科構造と五段階の学習過程論から整理することにより，系統的に学びを保障することができるようになる。

(2) 小説教材観の転換と〈情報リテラシー〉

〈情報リテラシー〉という発想により，新しい小説教材観から，小説教材で身に付けるべき言語技術が明確になり，到達目標（評価基準）を明示することができるようになった。また，「書くこと」「話すこと・聞くこと」など，他領域とも構造的に国語科の果たす役割を捉え直すことができる。

資料３　学習シート１（学びのつまづき・課題意識の言語化シート）

【学習シート１】
感想交流シート―村上春樹「七番目の男」―　　氏名（　　）

1　「七番目の男」を読んで、興味をもった場面とその理由を書こう。

場面　理由

場面　理由

2　わからない・考えてみたい場面とその理由を書こう。

場面　理由

場面　理由

3　この小説を読むために、大切だと思う場面や部分とその理由を書こう。

（1）

（2）

4　優れていると思う「表現」や「イメージ」を抜き出し、その理由を書こう。

（1）　理由

（2）　理由

5　この小説を読んでの自分の「意見」「感想」を書こう。

資料４　学習シート２（構造・あらすじ読み取りシート）

【学習シート２】
小説の構造（場面）・あらすじを読み取ろう―村上春樹「七番目の男」―　　氏名（　　）

1 場面　プロローグ　状況設定（現在）
中心人物〔　　〕年齢〔　　〕
特徴　痩せ型・長身・口ひげ・右目わきに深い傷〕
〔私（七番目の男）が〔　　〕歳の年の〔　　〕月の午後に巨大な〔　　〕によって〔　　〕を〔　　〕に運び去られた。

2 場面　状況設定（過去）
小説の舞台〔　　〕
対比的人物〔　　〕年齢〔　　〕
特徴　痩せて色白・〔　　〕に障害がある・〔　　〕が滅法巧い

3 場面　展開①　台風の来襲
この十年ばかりのあいだで〔　　〕の〔　　〕が来襲する。
大人にとっては迷惑だが、〔　　〕ところにいる子供にとっては大がかりなわくわくする催し物のようなもの。

4 場面　展開②　台風の「目」と波の予感
私は空にひとつの〔　　〕がぽっかり浮かんで、私たちを冷ややかに見おろしている気がした。〔　　〕
私とKは海を見に行き、波の予感を感じる。
【波の表現】
・何かひどく〔　　〕
・故のない〔　　〕
・その波は〔　　〕を持っている
・地面を震わせるような〔　　〕
〔（ごぼごぼ、ごおおおお）〕

5 場面　展開③　Kの喪失
巨大な波が〔　　〕をさらう。
【波の表現】
・〔　　〕のように高く鎌首をもたげて
・三階建てのビルぐらいの高さ〔　　〕な静寂
・波が去った後の〔　　〕

6 場面　展開④　Kの笑い
二度目の波の先端部分に〔　　〕の姿を見る。
Kの姿　・〔　　〕に閉じこめられたみたい〔　　〕くらいの笑い

7 場面　展開⑤　損なわれた現実
私は気（意識）を失い、数週間ののちに肉体的には回復するが、Kの遺体は見つからなかった。
私は父に何かを言おうとするが、〔　　〕が出てこなかった。
まるで、〔　　〕みたいな感じ

8 場面　展開⑥　無意識のトラウマ
Kが私に笑いかけ、私を波に引きずり込む〔　　〕をみる。

9 場面　展開⑦　現実逃避と無意識
私は〔　　〕県に移り、結婚をせず、〔　　〕以上故郷にも海にも近づかなかった。しかし忘れかけた頃に〔　　〕がやってくる（細部までぴたりと同じ）。

10 場面　展開　Kの水彩画
Kの描いた〔　　〕を見て、故郷に戻る決心をする。
※私は絵を眺めながら、自分がKとともにやったことや、ともに訪れた場所のことを、ひとつひとつ鮮やかに思い出していました。そうです、それは〔　　〕でもあったのです。その頃の私はKと二人で肩を並べて、同じような〔　　〕で世界を見ていたのです。

11 場面　結末　現実への回復
私は故郷の街に帰り、〔　　〕を見上げ、少年時代の自分を思い出す
それ以来、あの恐ろしい夢をみることがなくなった。
街の風景は大きく変貌　・駅前には〔　　〕が立ち並び、映画館は〔　　〕になる。
・私の家は〔　　〕になり、Kの家は〔　　〕になる。
※すべては私が頭の中で作り上げた〔　　〕ではなかったかと思えたほどです。

12 場面　エピローグ　恐怖の真相
※「私は考えるのですが、この私たち人生で真実怖いのは、恐怖そのものではありません。」
男は少しあとでそう言った。「恐怖はたしかにそこにあります。……それは〔　　〕をとって現れ、ときとして私たちの存在を圧倒します。しかしなにより怖いのは、〔　　〕ことです。そうすることによって、私たちは〔　　〕を何かに譲り渡してしまうことになります。
私の場合には――それは波でした」

資料5　学習シート3（現代小説の「学び方」シート例）

【学習シート3】
現代小説の「読み方」を学習しよう―村上春樹「七番目の男」―

氏名（　　）

1　中心人物の設定とその効果

前時で学習したように、中心人物である「男」が十歳の時に「事件」がおこりました。なぜ、その年齢が設定されたのでしょう。

［ヒント］
台風が来たときに、子供にとっては「大がかりなわくわくする催し物」のように感じられました。それはなぜだったからでしょうか。

◆みなさんが十歳の時にこのような「事件」に遭遇したらどのようにこの「事件」と向き合うか想像してみましょう。

2　中心人物の変化とその要因

「男」は作品の中で、二度大きく変化します。変化した場面とその要因を考えましょう。

（1）「男」を四十年間も苦しめ続けていたのは何でしょう。

［ヒント］
6場面で見たイメージが、7・8・9場面でも繰り返し「男」を苦しめ続けます。それによって、「男」は現実と向き合うことが出来なくなってしまいました。

（2）一度目の変化

［　　］場面
変化の要因

（3）二度目の変化

［　　］場面
変化の要因

［ヒント］
（1）によって、7・8・9場面で「男」を苦しめ続けることになるきっかけと、そこから回帰するきっかけについて考えましょう。

3　描写の効果

（1）一度目の変化のきっかけである「台風」の様子が効果的に描かれている三箇所の部分を四角で囲みましょう。

①聴覚（音）のみの表現（4場面）
②視覚（映像）のみの表現（5場面）
③聴覚と視覚による表現（5場面）

このように感覚を分けて表現することにより、まるでスローモーションのように描かれています。このような効果的な表現を「描写」といい、小説の方法の特徴です。

（2）二度目の変化の様子が効果的に描かれている部分を四角で囲みましょう。

時間・音・光・身体感覚などがダイナミックに描かれています。これにより、「七番目の男」の変化が効果的に現されます。これも特徴的な「描写」です。

◆この作品には他にも効果的な「描写」が多くみられます。小説を読むときには、「描写」とその効果を意識して読むと、より一層楽しめます。

4　対比的人物の設定とその効果

（1）この作品で対比的な人物として描かれているのは誰でしょう。

小説を読むときには、中心人物にだけではなく、対比的な人物にも注目しなければいけません。
対比的人物とは、中心人物の行動や考えを際だたせたり、中心人物に影響を与えたりする役割があります。

（2）「男」が故郷の街に帰るきっかけを与えたのは、何でしょう。

［ヒント］
対比的人物である「K」は、「言葉に障害」があり、「絵が滅法巧い」人物として設定されています。

（3）対比的人物「K」の設定の効果を考えましょう。

［ヒント］
「K」は「言葉」ではなく「絵」（見ること）で現実世界を認識し、存在していました。9場面で「七番目の男」に帰郷を決意させ、過去を語らせた「Kの水彩画」とは、どういう意味をもっているのでしょうか。

5　象徴的イメージと主題の構造

この作品では、「私の場合、それは波だった」や「私にとってもっとも大事なもの」、「別の世界」といった読者に想像させるような書き方がなされています。では、「波」や「もっとも大事なもの」、「別の世界」とは、何を象徴しているのでしょう。

（1）波

［　　］

（2）もっとも大事なもの

［　　］

（3）別の世界

［　　］

［ヒント］
10場面で、現実社会が「頭の中で作り上げた精密な幻影」と表現されています。四十年間「七番目の男」（の意識）を支配していたのは、「悪夢」という非現実（無意識）でした。つまり、現実と非現実が逆転していたのです。

（1）は、「私（男）にとってはたまたま波だった」のであり、「それは様々なかたちをとって現れ、ときとして私たちの存在を圧倒」するものです。

（2）は、「男」が「波」によって失ったものです。Kや四十年もの歳月ももちろんそうですが、「Kの水彩画」を見ることによって回復した「男」にとっての「もっとも大事なもの」とは何だったでしょうか。

（3）は、四十年間「男」を苦しめ続けた世界のことです。「別の世界」という表現を広い意味で解釈してみましょう。

現代小説では、日常的な事件（表層）の背景に、もうひとつの大きなテーマ（深層）が描かれることがよくあります。そこに、作家の現代社会（現代人）への問題意識があらわれます。
村上春樹には、「夢」や「眠り」などの非現実（無意識）を描くことによって、現実社会を批評するという方法が多く見られます。

（4）この作品の主題は何でしょう。

［ヒント］
人間は、「波」のような理不尽な出来事で、自分にとっての「もっとも大事なもの」を見失ってしまうことがあります。それは、自分の知らない「別の世界」にとらわれ続けることなのです。

［主題の考え方］主題とは、作品によって伝えられる中心的なメッセージのことです。主題は大きく三つ考えられます。
①作家の主題…他作品などでも多く見られる作家固有の問題意識
②作品の主題…作品の構造・描写にみられるメッセージ
③読者の主題…読者が作品から自由に受けとるメッセージ
ここでは、②について考えましょう。

◆主題の考え方③のように、読者が作品から自由にメッセージを受け取ることも、小説の楽しみの一つです。みなさんがこれまでに読んできた小説や見てきた映画などと共通するイメージや、みなさんの体験から気になったことなどを大切にして小説を読むといいでしょう。

メモ欄

資料６　学習シート４（論理的な「構成」「発信」モデルシート）

【学習シート４】
作品紹介文を書こう①―村上春樹「七番目の男」―

氏名（　　）

自分の立場をきめ、個性的な観点から「七番目の男」の論理的な作品紹介文を書きましょう。テーマは〔私はこう読む「七番目の男」〕です。この授業では以下のことに気を付けて、「論理的」な文章を書く観点を学習しましょう。

（１）作品紹介のための個性的な着眼点を見つけよう。

①気になった人物について
…「七番目の男」には、たくさんの人物が登場します。その中の一人について、思ったこと・考えたことを具体例をあげて書きましょう。

②描写について
…これまで学習したように、「七番目の男」には効果的な描写が多く見られます。授業で扱ったところでもそれ以外でも、描写に着目して紹介しましょう。
（例）自然描写
１場面
風は庭の木々の葉を揺らせ、窓のガラスをかたかたと細かく震わせ、それから小さな呼び子を吹くような甲高い声を上げて、どこかに抜けていった
１２場面
風はすっかり止んだらしく、外には物音ひとつ聞こえなかった。

③主題の解釈について
…自分の経験や読書などから作品のメッセージを自由に読み取り、根拠を具体的に示して紹介しましょう。

など

（２）四段階の論理的な構成で書く。

論理的な文章を書く順序は、
はじめ→まとめ→なか→むすび（タイトル）
が書きやすい。

①はじめ（全体の十分の一が目安）
…どういう観点から紹介するかを書く。

私は、
［　　］
について紹介する。

②なか（全体の十分の六が目安）
…紹介のための具体例を書く。この授業では具体例を三つ書きます。

なか１　作品のあらすじをまとめる。
（「学習シート２」を参考にして、あらすじを要約しましょう。）
［　　］

なか２・３
作品紹介の具体例を２点選んで書く。そのとき、作品を引用（「」を使う）すると効果的である。
なか２
［　　］
なか３
［　　］

③まとめ（全体の十分の二が目安）
…自分の立場や意見を書く。このとき、「なか」の内容とずれないように書こう。
［　　］

④むすび（全体の一〇分の一が目安）
…紹介する観点・内容を一言であらわす。

この作品は、
［　　］
であるといえる。

（３）タイトルをつける。
効果的なタイトルを考えよう。このとき、むすびのキーワードを用いるのが基本。

［　―私はこう読む「七番目の男」―　］

資料７　学習シート５（論理的な「構成」モデルシート）

【学習シート５】
作品紹介文を書こう②―村上春樹「七番目の男」―

氏名（　　）

タイトル
［　―私はこう読む「七番目の男」―　］

はじめ	なか１	なか２	なか３	まとめ	むすび

「学習シート４」を参考に、論理的な構成を意識して作品紹介文を書きましょう。
早くかけた人は、論理的な構成を変形して、より効果的になるように工夫してもいいです。
①まとめ・はじめ・なかまとめ型
②むすび・はじめ・なかまとめ型
③はじめ・なかまとめ・むすび型
④はじめ・なかまとめ・むすび型
これらの書き方は随筆（エッセイ）などによくみられます。しかし、それぞれの部分まで変形してはいけません。各部分の構成要素を無視すると、論理的ではなくなるからです。

資料8　学習シート6（到達目標チェックシート例）

【学習シート6】
到達度チェックカード―村上春樹「七番目の男」―

氏名（　　）

1　「七番目の男」の学習について振り返り、自己評価しよう。（◎　○　△を付けよう）

基礎項目	① すらすらと音読することができた。	
基事	② 場面構成や表現・イメージなどを意識して感想を持つことができた。	
設定構造	③ 作品の設定（舞台・中心人物・対比的人物）がわかった。	
設構	④ 作品の構造（12場面）とおおまかなあらすじをとらえることができた。	
人物像の設定と効果	⑤ 男の設定の効果が理解できた。	
	⑥ 男の変化した場面とその要因が指摘できた。	
	⑦ Kの設定の効果が理解できた。	
描写の特質主題の構造	⑧ 描写を指摘し、その効果について理解できた。	
	⑨ 波・もっとも大事なもの・別の世界の象徴的イメージを理解できた。	
	⑩ 主題の構造を知り、「七番目の男」の主題をとらえることができた。	

2　作品紹介文を書く学習について振り返り、自己評価しよう。（◎　○　△を付けよう）

① 四段階の論理的構成で書くことができた。	
② 「なか1」であらすじを要約できた。	
③ 「なか2・3」で引用を効果的に使うことができた。	
④ 「むすび」と「タイトル」を工夫することができた。	
⑤ 論理的構成を変形して、より効果的に工夫することができた。	

3　クラスメートの「書評」を読んで、上手だと思った人とその理由を書こう。

名前	理由（自分の気付かなかった観点や上手な文章表現など）

4　今回の学習を通して学んだこと・考えたことを自由に書こう。

学んだこと	考えたこと

(3) 具体的な「授業モデル」による提案
—教材研究論から授業研究論まで—

教材の特質を生かした教材研究，さらに学習過程（学習計画）・学習シート（主要発問）などを明示した「授業モデル」として具体的に考察したことで，今日的な授業力育成という課題に，具体的かつ本質的に応えることができるようになる。

おわりに

本稿では，新課程・絶対評価の時代に対応した，新しい小説教材指導について，具体的な学習シート・授業モデル開発という形で提案した。限られた授業時数の中で，学習者全員に確かな学力を保障をするためには，本質的・具体的な到達目標（評価基準）と評価が一体化した学習システムを構築していく必要がある。

なお，本稿は愛知教育大学大学院・平成16年度修士論文「小説教材における授業研究論—村上春樹の短編を例に—」（平成16年1月提出　指導教官・佐藤洋一）の一部である。まとめるにあたって，新しい小説教材指導のための「学習・評価システム論」・村上春樹の授業モデル，その要点を提案することに重点を置いた。そのため，小説教材指導の変遷についての考察，小説教材指導と文学批評理論との関係等については，詳細に論じることができなかったことをお断りする。

〈主な参考文献〉

1　村上春樹『レキシントンの幽霊』（文藝春秋　1996. 11）
2　加藤典洋他『群像日本の作家26　村上春樹』（小学館　1997.5）
3　第一学習社『高等学校現代文　指導と研究』第六分冊（平成15年度版）
4　国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（明治図書　1988）
5　佐藤洋一　連載「到達目標としての「言語技術」」（『教育科学国語教育』明治図書　2003.4～2004.3）
6　佐藤洋一「「基礎学力」を保障する国語科リテラシーの開発—情報リテラシー・評価基準をめぐって—」（『国語国文学報　第60集』愛知教育大学　2002.3）
7　佐藤洋一・鈴木悟志「実践・文学を〈情報〉としてとらえる発信型の国語科学習—小説教材『父の列車』（中1）の基本学習から情報の発信（絵本のブックトーク）へ—」（『愛知教育大学研究報告　第50輯（教育科学編）』愛知教育大学　2001.3）
8　佐藤洋一編著『実践・国語科から展開するメディア・リテラシー教育』（明治図書　2002.9）
9　佐藤洋一「国語科「単元学習」批判（全7回）」（『現代教育科学』明治図書　2004.9～2005.3）
10　佐藤洋一編著『豊かな学びを育てる選択教科「国語」と「総合的な学習」』（中学校国語科教育CD-ROM授業実践資料集（全12巻）所収　ニチブン　2005.5）
11　市毛勝雄『文学的文章で何を教えるか』（明治図書　1983.8）

（平成17年9月5日受理）